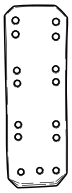
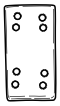
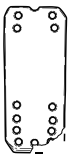
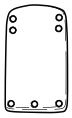
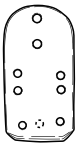
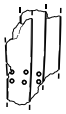
第７章　出土位置不明の遺物

１　小 札 群　（図版 160 ～ 181、第 136 ～ 156 図）

発掘報告に実測図や写真の掲載がなく、竪穴式石槨内または石槨外出土と確定できた小札とは別の保管箱などで保管されていたものである。本古墳出土の小札ではあるが、石槨内外のいずれから出土したものか確定できないため、出土位置不明として報告する。

出土位置不明の小札は、９種に分類することができる。石槨外出土小札と共通するものが多いが、調査時には石槨内からも多数の小札が出土しているため、両者に帰属する小札が混在している可能性もある。なお、分類の名称は石槨外出土小札と同種のものについては、同様に呼称する。

頭部形状	方　頭				偏円頭
縅 孔 列	２　列				２列
綴 孔 数	８孔	４孔		６孔？	０孔
下搦孔数	３孔	０孔	１孔	３孔	３孔
湾　　曲	なし	なし	なし	なし	なし
第３縅孔	なし	なし	なし	なし	なし
法　　量	71×24mm	37×20mm	28×15mm	60×22mm	42×25mm
模 式 図	 方頭小札Ａ類	 方頭小札Ｃ類	方頭小札Ｄ類	 方頭小札Ｅ類	 偏円頭小札Ａ類

頭部形状	円　頭			
縅 孔 列	１　列			
綴 孔 数	４　孔		12 孔？	８孔？
下搦孔数	３　孔		２孔	１孔
湾　　曲	な　し		あり	あり
第３縅孔	な　し		あり	あり
法　　量	56×26mm	35×22mm	(全長不明)×16mm	(全長不明)×12mm
模 式 図	 円頭小札Ａ類	円頭小札Ｂ類	篠状鉄札	 小型篠状鉄札

第 135 図　出土位置不明小札群の分類

方頭小札 A 類（1 ～ 150）　頭部は方形を呈し、上端部・下端部の四隅が隅切りされている。全長 7.1 ～ 7.2㎝、幅 2.3 ～ 2.5㎝、厚さ 1 ㎜である。頭部付近には、2 列に並んだ縅孔が 4 孔穿たれる。中位には、2 列に並んだ綴孔が 8 孔穿たれる。札足付近には、下搦孔が 3 孔穿たれる。かえしやきめだしは良好に確認できる。

石槨外出土の方頭小札 A 類と同様の連結技法が確認できる。縅技法は、一本の革紐を用いて上下の小札を連結する通段縅技法 a 類〔初村 2011〕で、小札裏面で立取りが確認できる。綴技法は、表面で立取となり、裏側で立取となるものや横方向にのびるものがあり凸凹状になるものと思われる。下搦技法については、石槨外出土のものと同様に、遺存状態の良好な資料が少なく、断定することはできないが、145 などでは下搦孔間を横方向にのびる革紐を確認できており、革包覆輪技法である可能性がある。

1 枚に遊離した小札と、複数枚が小札列をなすものや複数の段が保たれているものも遺存している。小札の重ね方向については、右上重ねと左上重ねの両者が確認でき、部位によって使い分けがなされていた可能性が考えられる。段については、現状で最大 4 段分が銹着するものを確認できる。

現状ではワタガミの遺存などは確認されないが、石槨外出土小札の特徴と合わせて考えれば、竪上・長側付近に使用されていた小札である可能性が高い。現状で遺存する 4 段という段数より考えれば、展開すると約 20cm になるものと思われる。

偏円頭小札 A 類（151 ～ 207）　57 点を図化した。石槨外出土の偏円頭小札 A 類と同形で、頭部は偏円形を呈し、下端部付近にいくにしたがってやや幅が広がる。頭部付近に 2 列に並んだ縅孔が 4 孔、札足付近に下搦孔 3 孔がそれぞれ穿たれる。全長 4.2 ～ 4.3㎝、最大幅 2.4 ～ 2.6㎝、厚さ 1 ㎜である。きめだし・かえしは確認できるが、方頭小札 A 類ほど明瞭ではない。

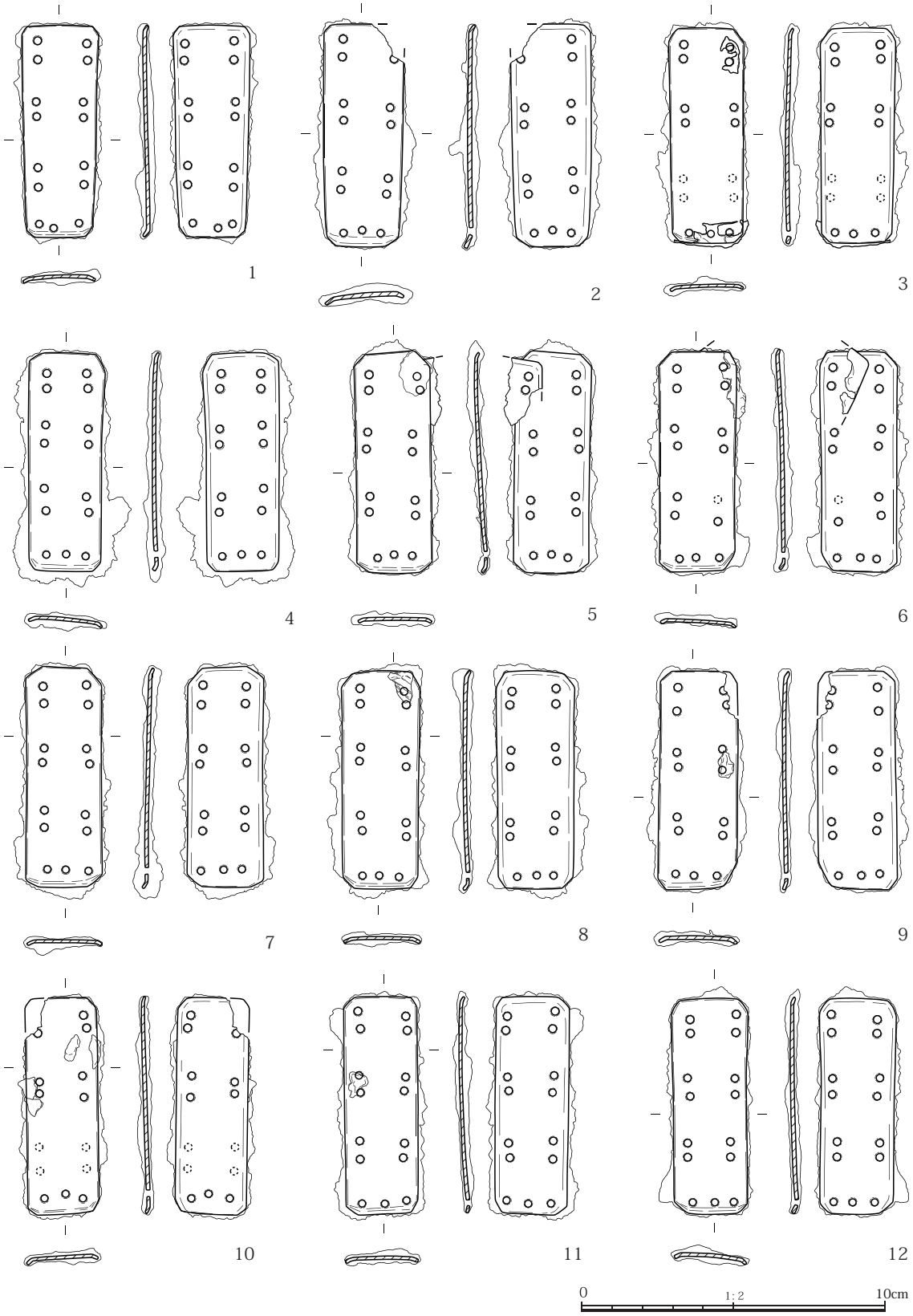
連結技法については、石槨外出土のものに比べてやや良好に確認することができる。縅技法は、表面で縅孔の範囲よりも広い革帯が付着しているものが確認できる（160・165・171・176・177）。特に、この中でも 165 については、その革帯を、縅孔からのびる革紐で綴じ付けていることが確認でき、綴付縅技法〔初村 2011〕であると推測される。下搦技法については、下搦孔間を横方向に革紐がのびるもの（165・167）と札足を革帯で包むもの（185・197）が確認でき、革包覆輪技法であることがわかる。これらの技法は、石槨外出土のものと同一であるとみられる。

1 枚に遊離しているものが多く、小札の重なりや段数などについては不明な点が多いが、207 は方頭小札 A 類と銹着した状態である。両者が近しい部位に使用されていた可能性があるだろう。

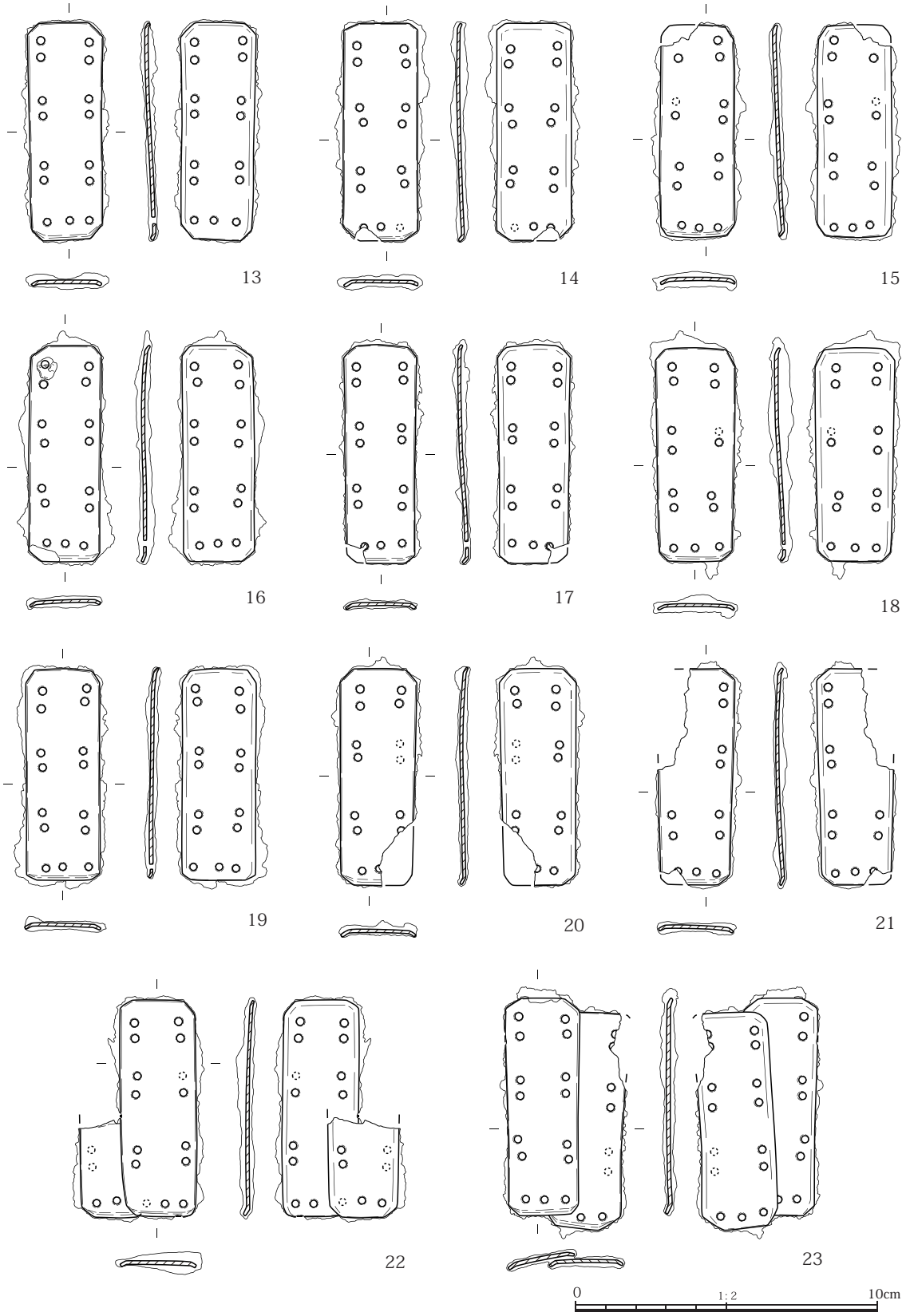
偏円頭小札 A 類のうち龍文銙帯金具が付着するものは石槨外出土品と判断し、第 6 章で報告した。一方、ここで報告したものの中にも、小札の中軸上に鋲や穿孔の痕跡があるもの（160・184）も確認でき、それらは龍文銙帯金具が取り付けられていた石槨外出土品であった可能性がある。

円頭小札 A 類（208 ～ 222）　15 点を図化した。石槨外出土の円頭小札 A 類と同形で、頭部は円形を呈し、下端部は隅切りがなされる。頭部付近に 1 列に並んだ縅孔 2 孔、中位に 2 列に並んだ綴孔が 4 孔、札足付近に下搦孔 3 孔がそれぞれ穿たれる。全長 5.6㎝、最大幅 2.6㎝、厚さ 1 ㎜を基本とするが、法量にはややばらつきがある。縦断面形は平坦な平札である。かえしやきめだしは、明瞭に確認できる。

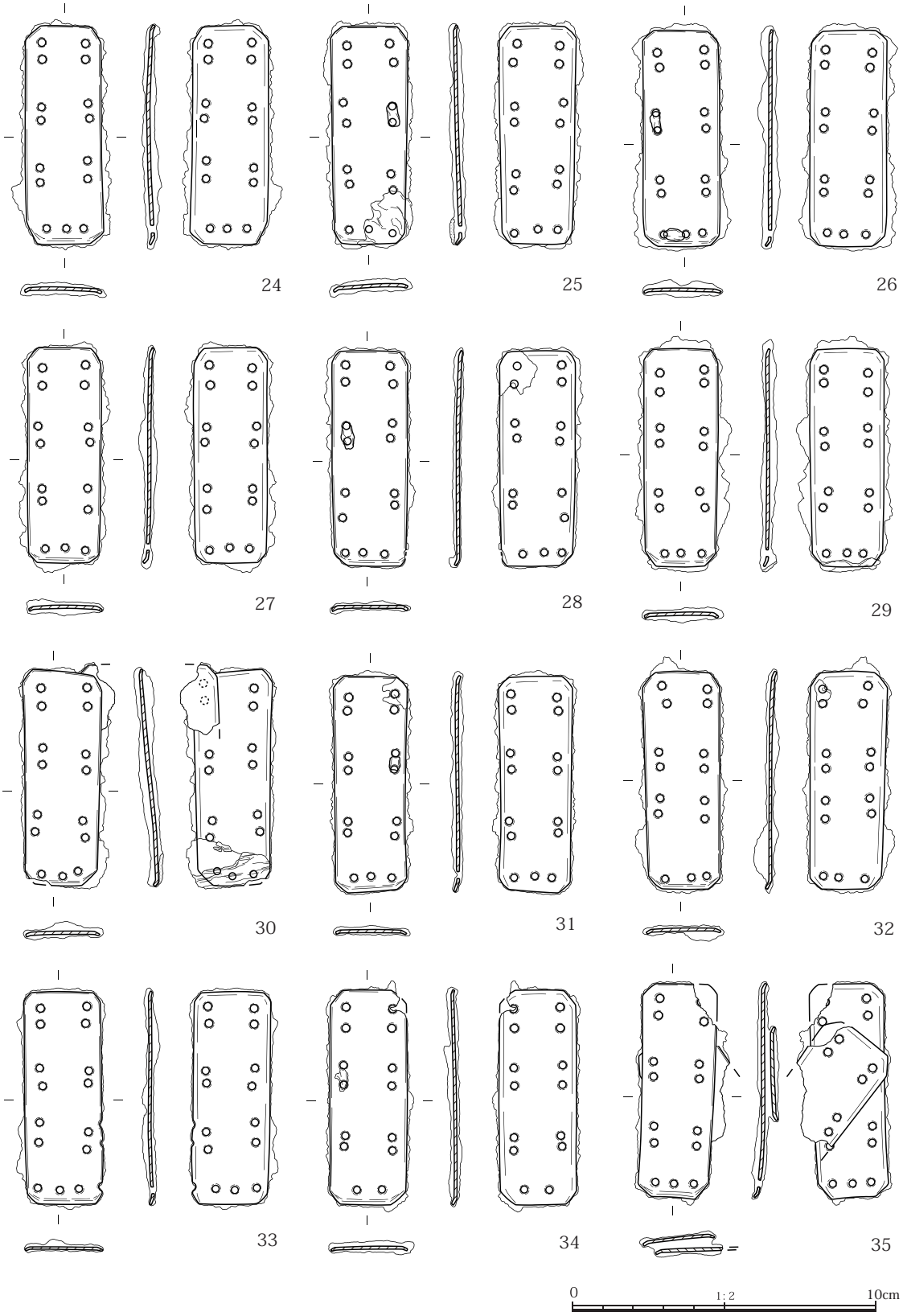
連結技法の遺存状況は良好である。縅技法は、上段からのびてくる革紐が表面にみられるものと（210 ～ 213・216・218 ～ 220）、裏面で立取となるもの（209 ～ 213・219）が確認でき、通段縅技法 a



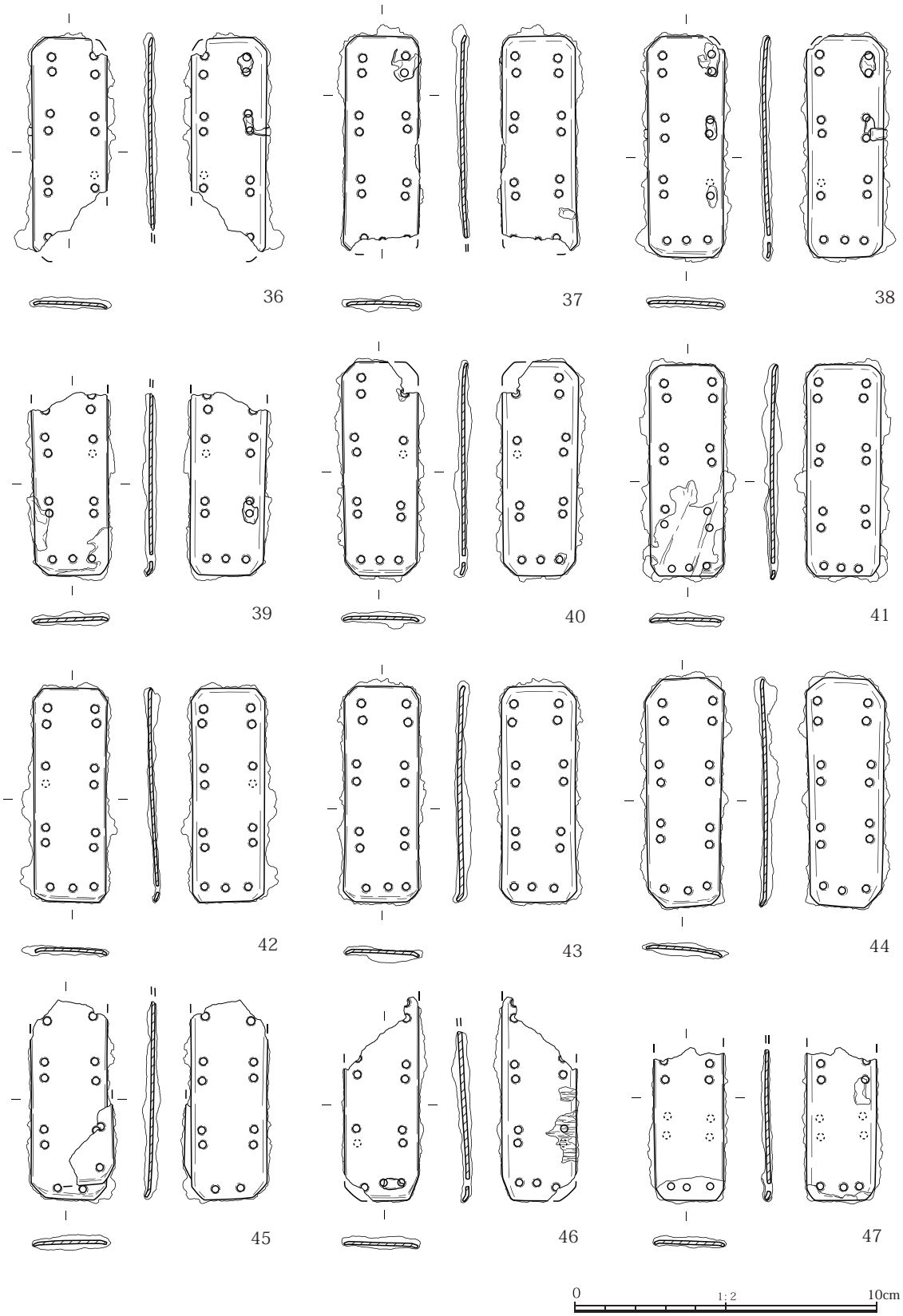
第 136 図　小札群実測図（1）：方頭小札Ａ類（1）



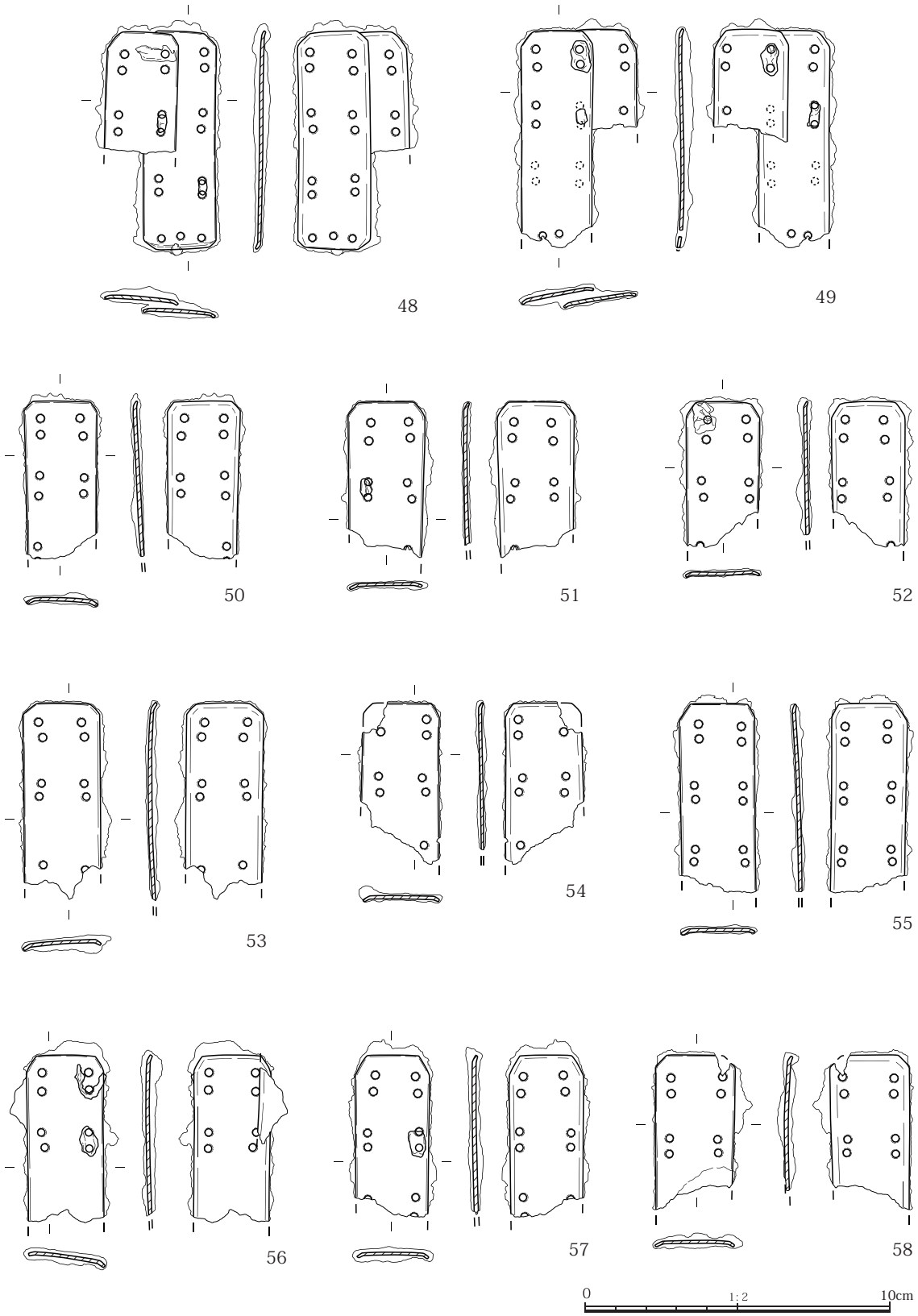
第 137 図　小札群実測図（2）：方頭小札Ａ類（2）



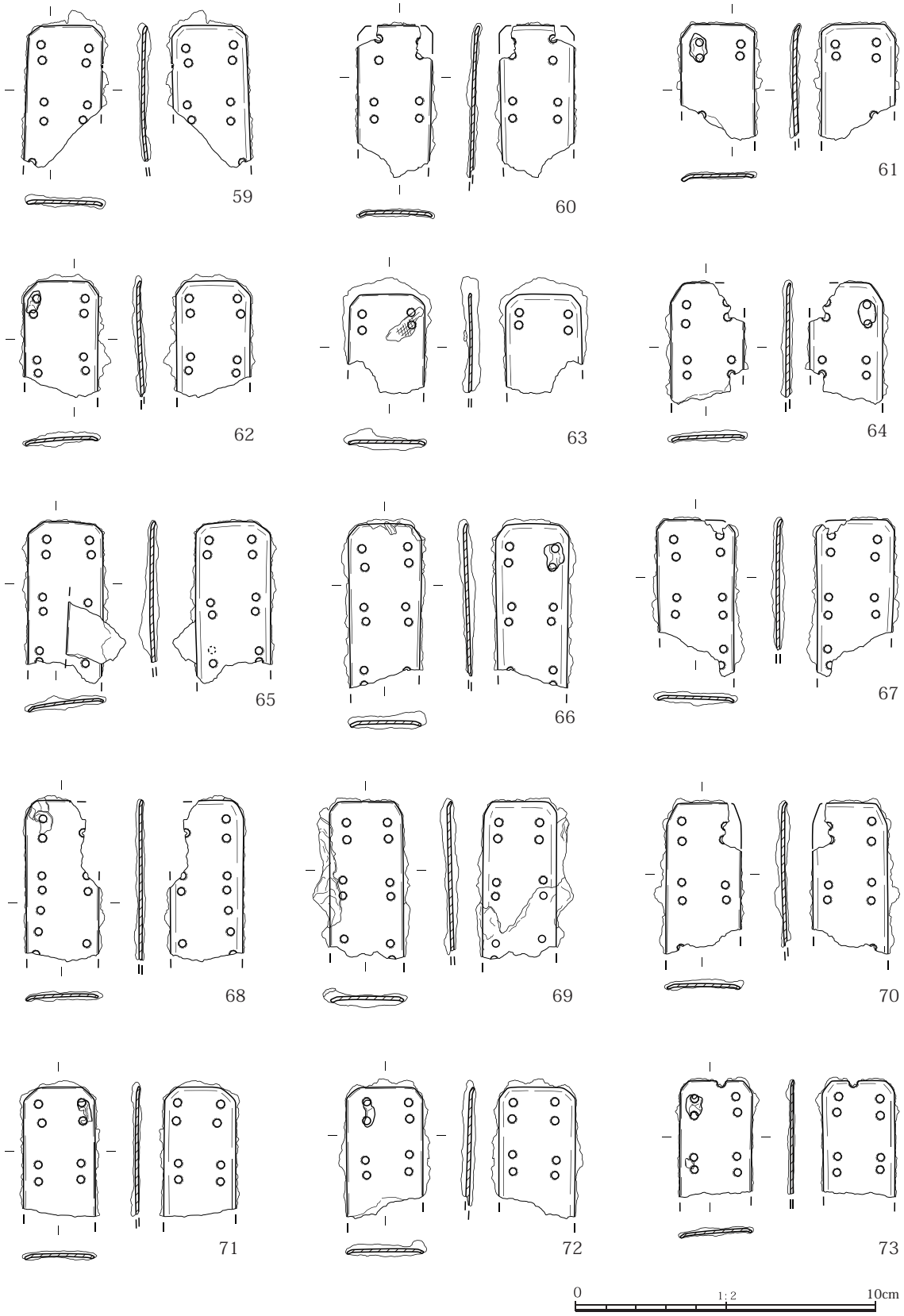
第 138 図　小札群実測図（３）：方頭小札Ａ類（３）



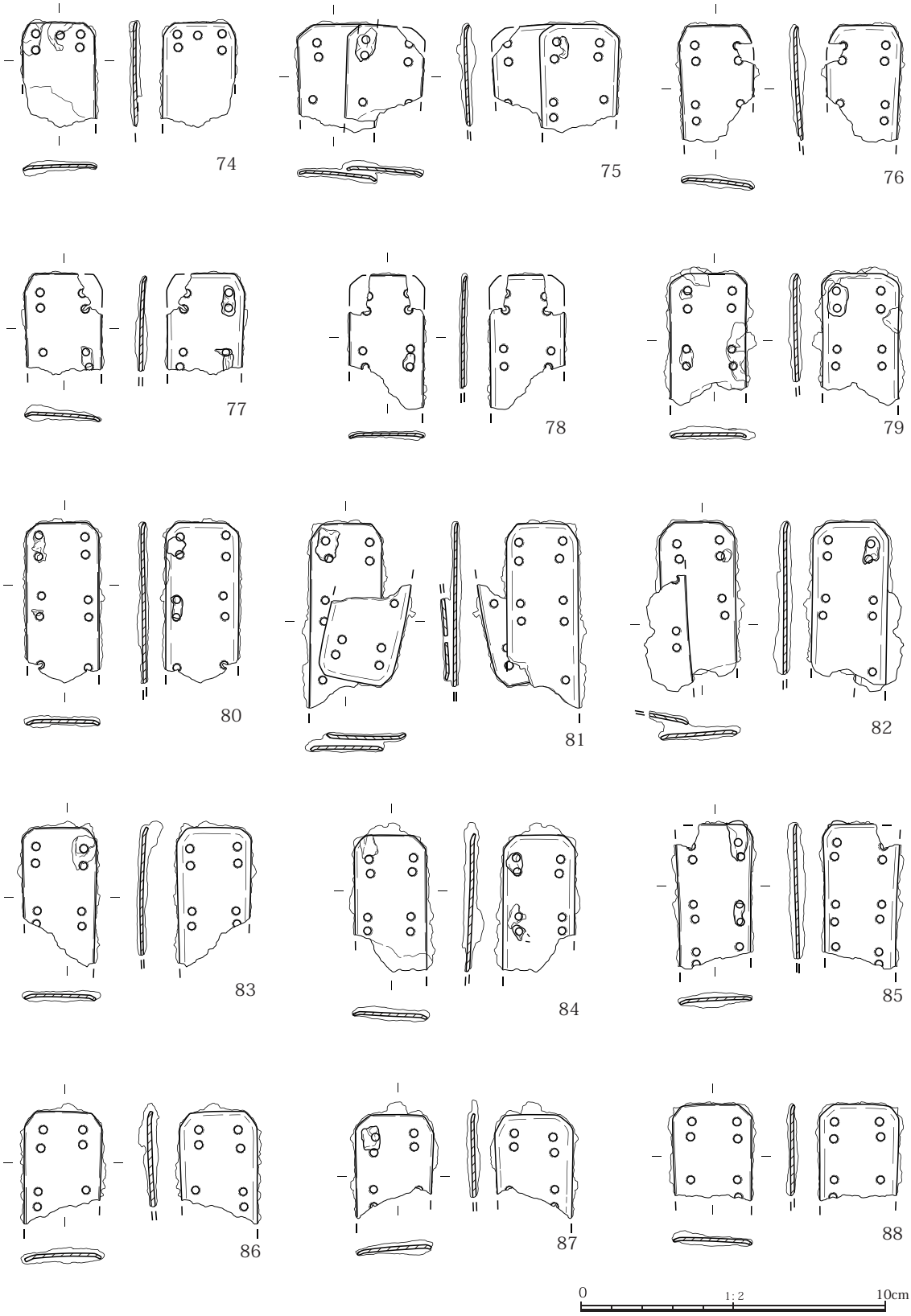
第 139 図　小札群実測図（4）：方頭小札 A 類（4）



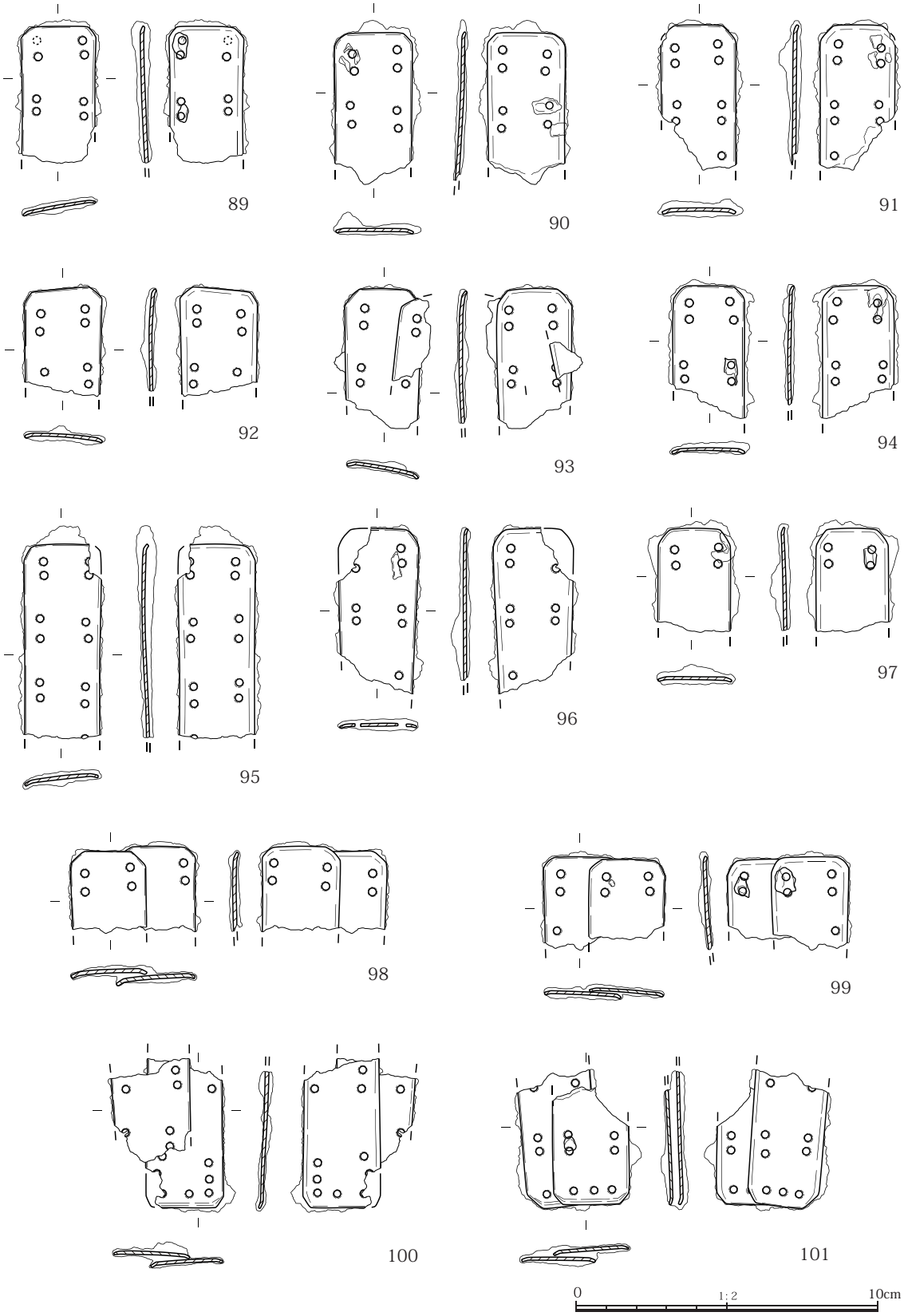
第 140 図　小札群実測図（５）：方頭小札Ａ類（５）



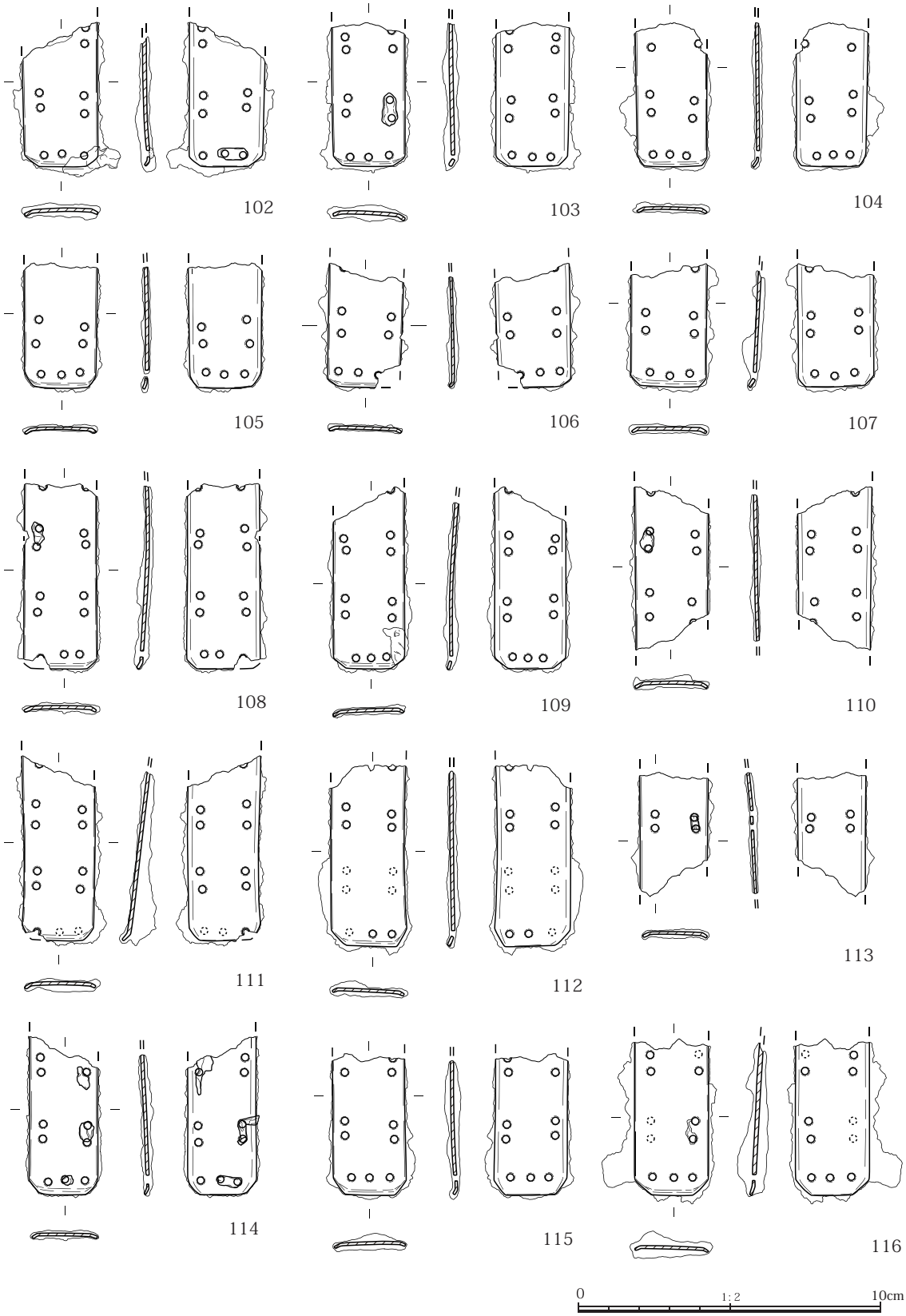
第 141 図　小札群実測図（6）：方頭小札Ａ類（6）



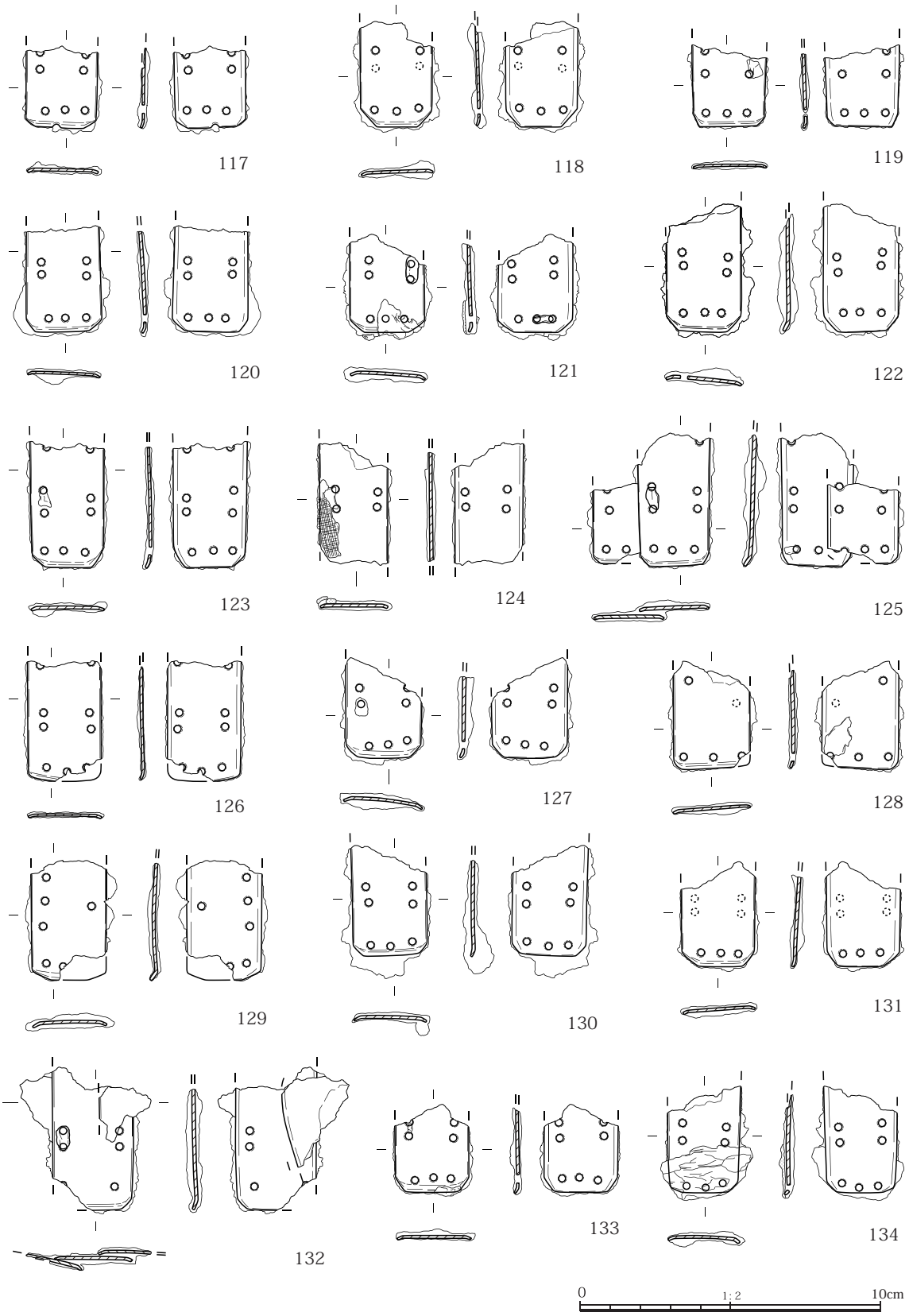
第 142 図　小札群実測図（7）：方頭小札Ａ類（7）



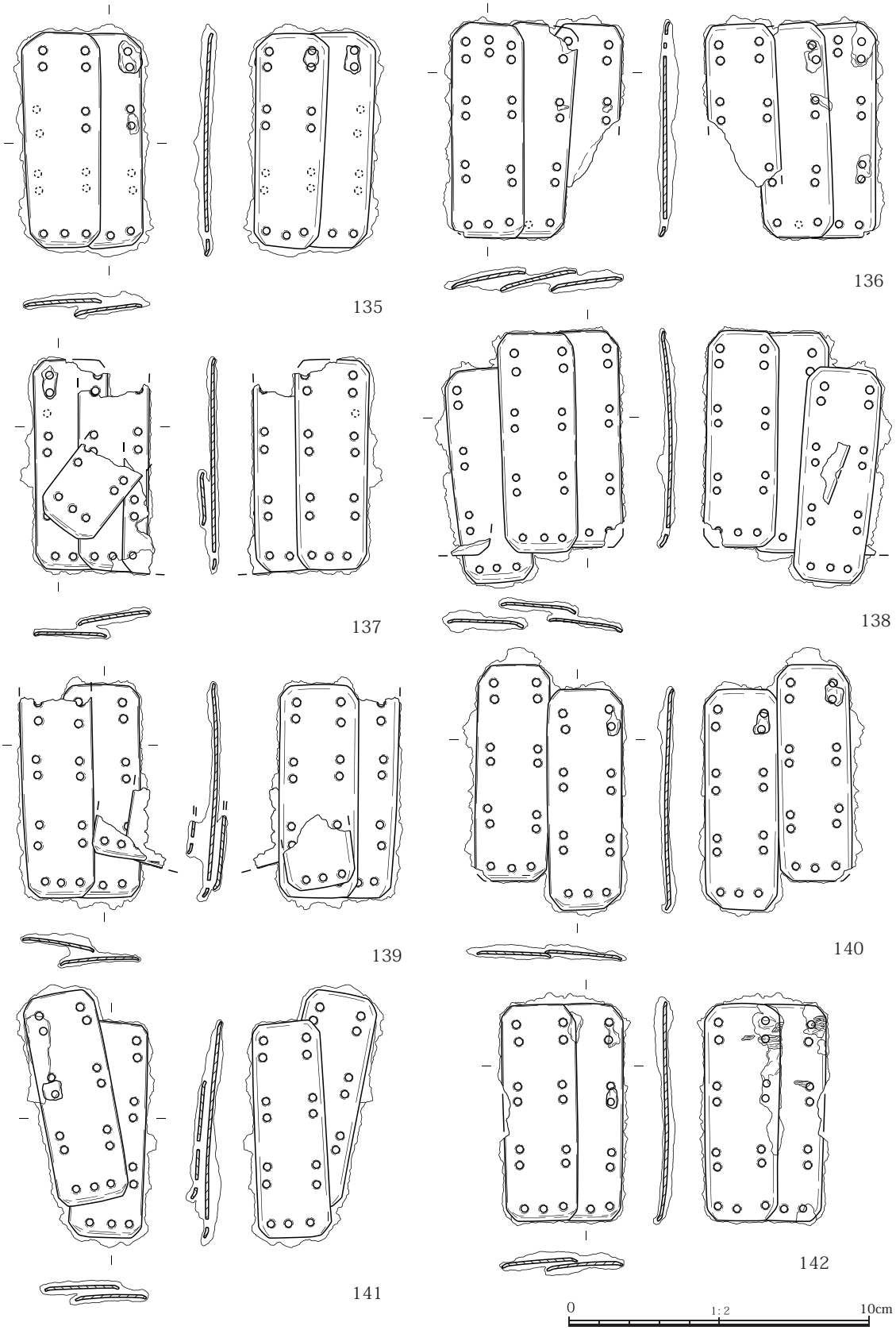
第143図　小札群実測図（8）：方頭小札A類（8）



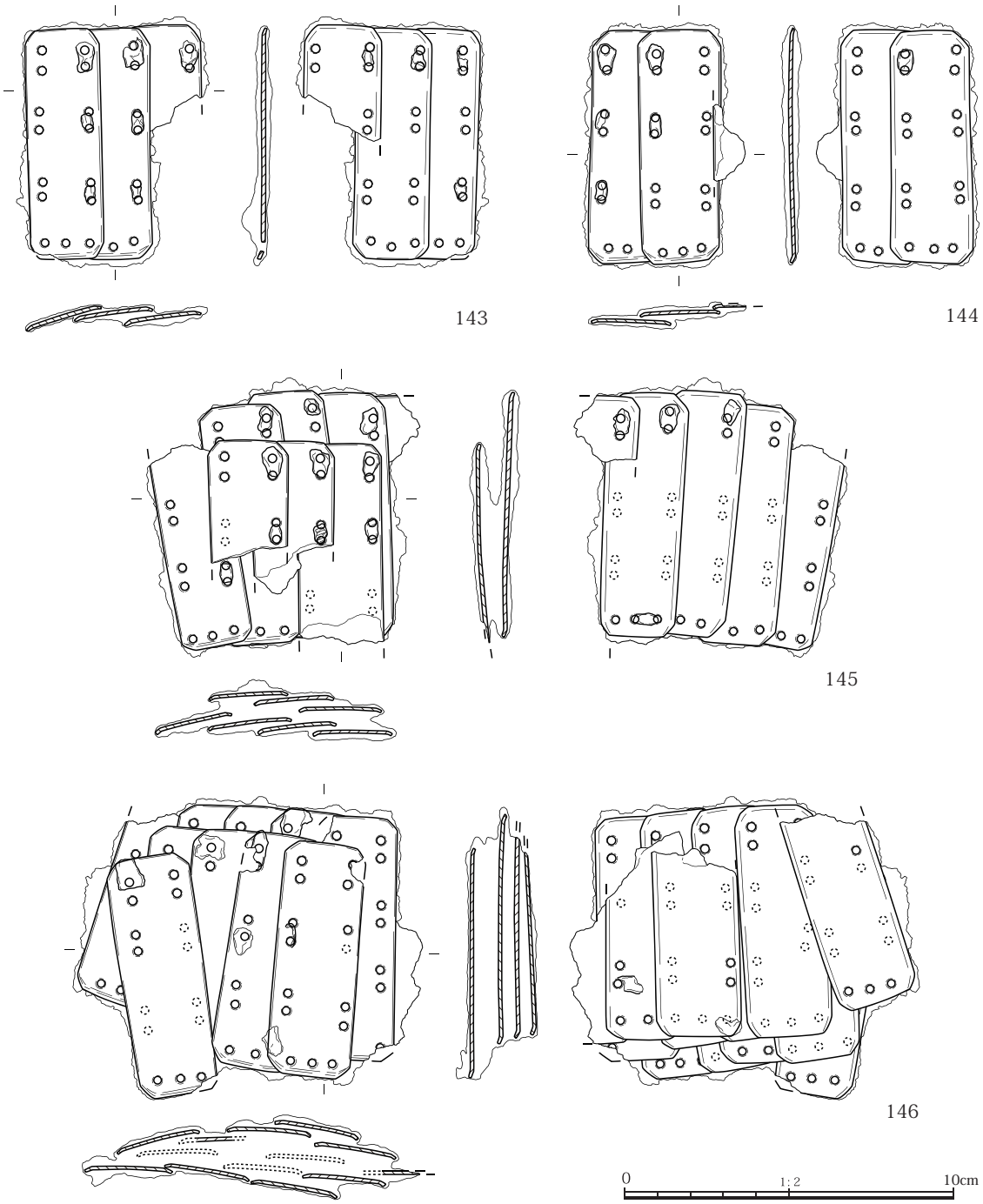
第 144 図　小札群実測図（9）：方頭小札Ａ類（9）



第 145 図　小札群実測図（10）：方頭小札Ａ類（10）

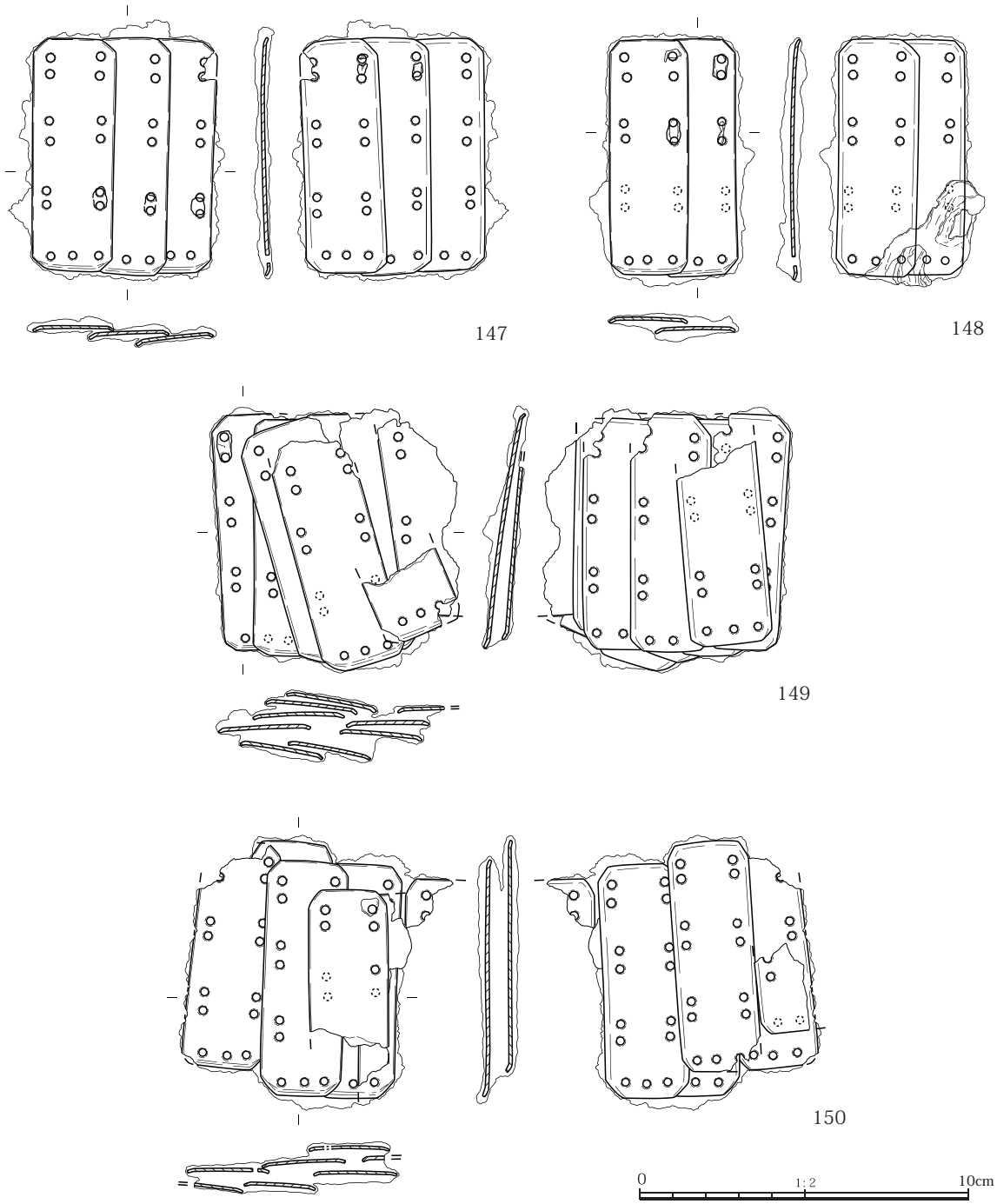


第 146 図　小札群実測図（11）：方頭小札Ａ類（11）



第 147 図　小札群実測図（12）：方頭小札 A 類（12）

類であることがわかる。綴技法は、表面で立取となるもの（208 ～ 211・214 ～ 216・219・221・222）があるが、裏面では鋸歯状となるもの（211）と斜行状になるもの（215 ～ 218）がある。下搦技法については、小札の札足に覆輪を被せるもの（218・221）と小札の札足に革紐をらせん状に巻きつけるもの（210・214）とがある。つまり、裾に該当するものには革包覆輪技法を、他の部位にはらせん状下搦技法をほどこすことで、部位による使い分けがおこなわれていたものと考えられる。石槨外出土のものと合わせて考えると、前者が草摺裾札、後者が草摺小札としてそれぞれ使用されたものと考

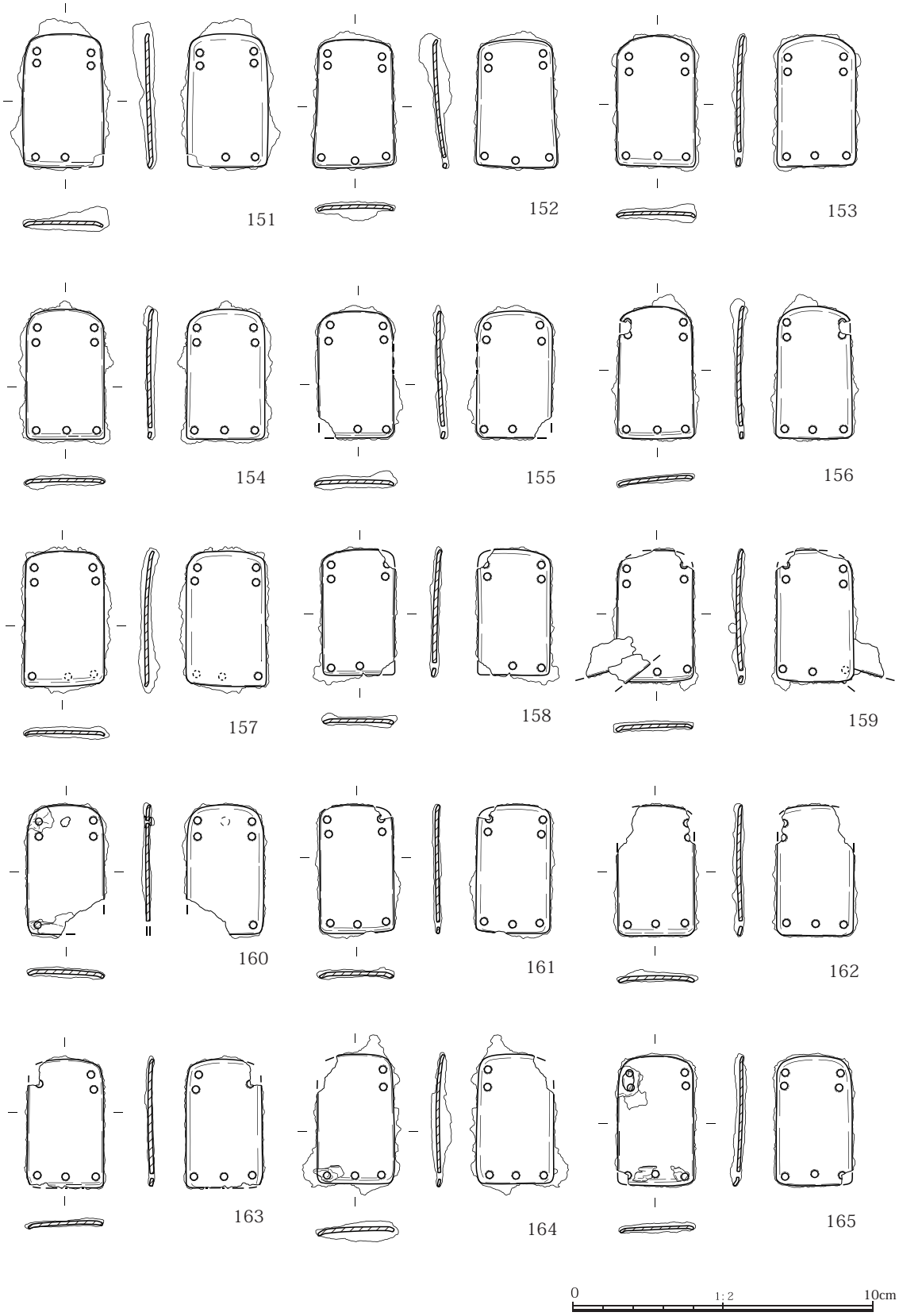


第 148 図　小札群実測図（13）：方頭小札Ａ類（13）

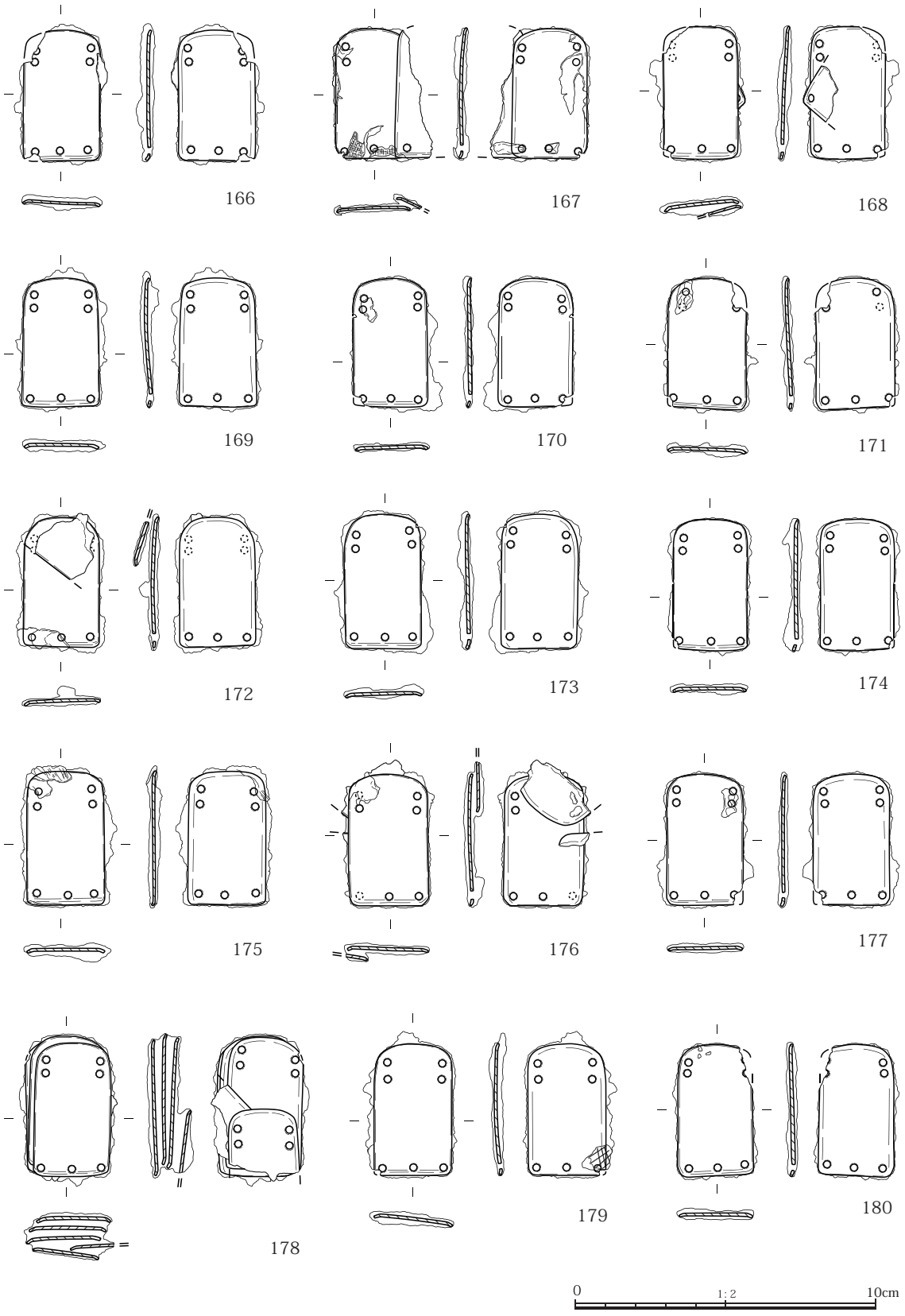
えられる。

１枚に遊離したものは少なく、大部分は複数枚の小札が連結された状態のものである。小札の重ねが遺存するものはいずれも右上重ねであるが、綴紐の立取となる位置などから左上重ねの小札も存在したことが確認できる。

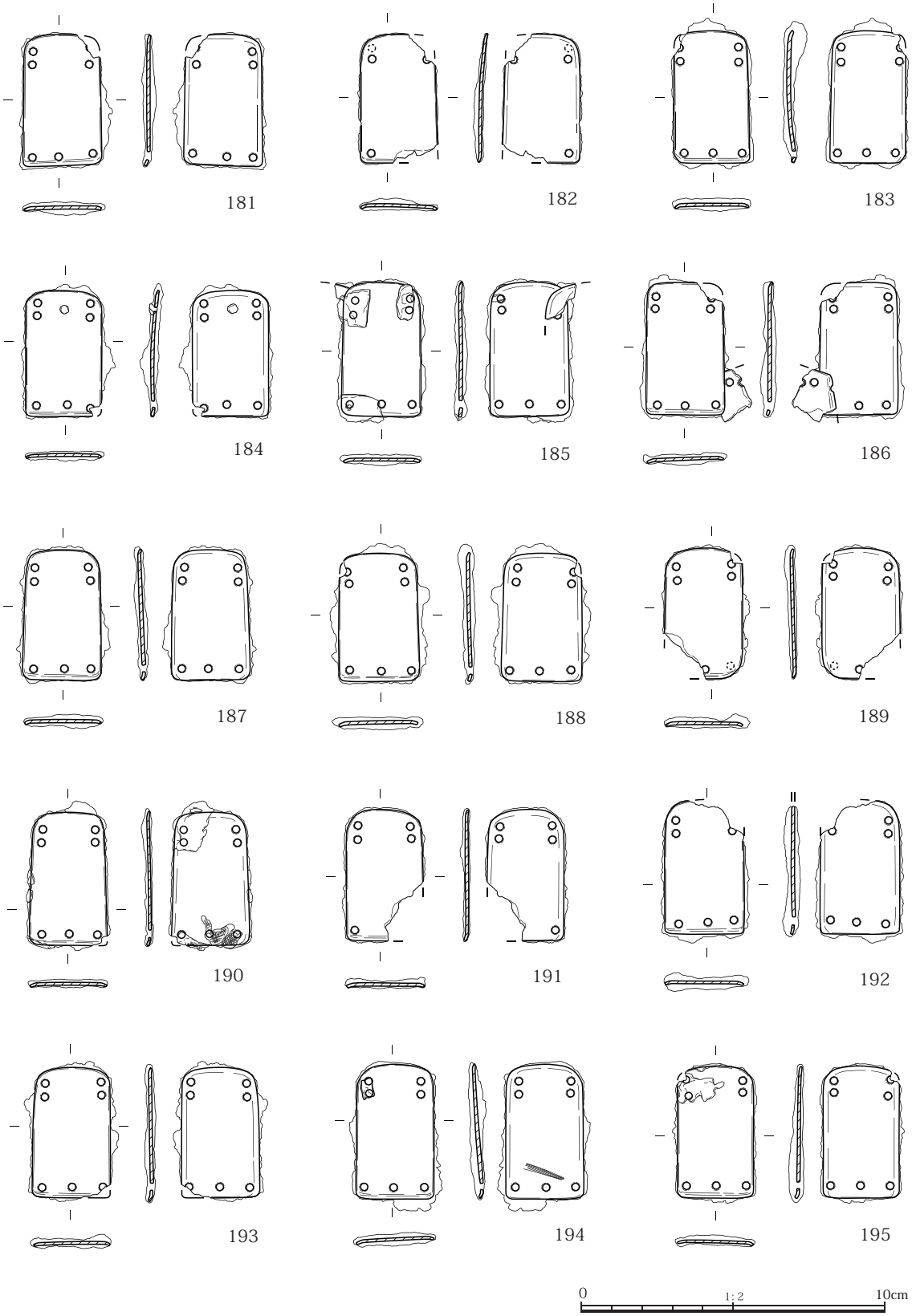
方頭小札Ｄ類（223～238）　16 点を図化した。石槨外出土の方頭小札Ｄ類と同形で、頭部が方形を呈し、上端・下端の四隅が隅切りされる。下端の隅切りは上端の隅切りよりも大きい。頭部付近に２



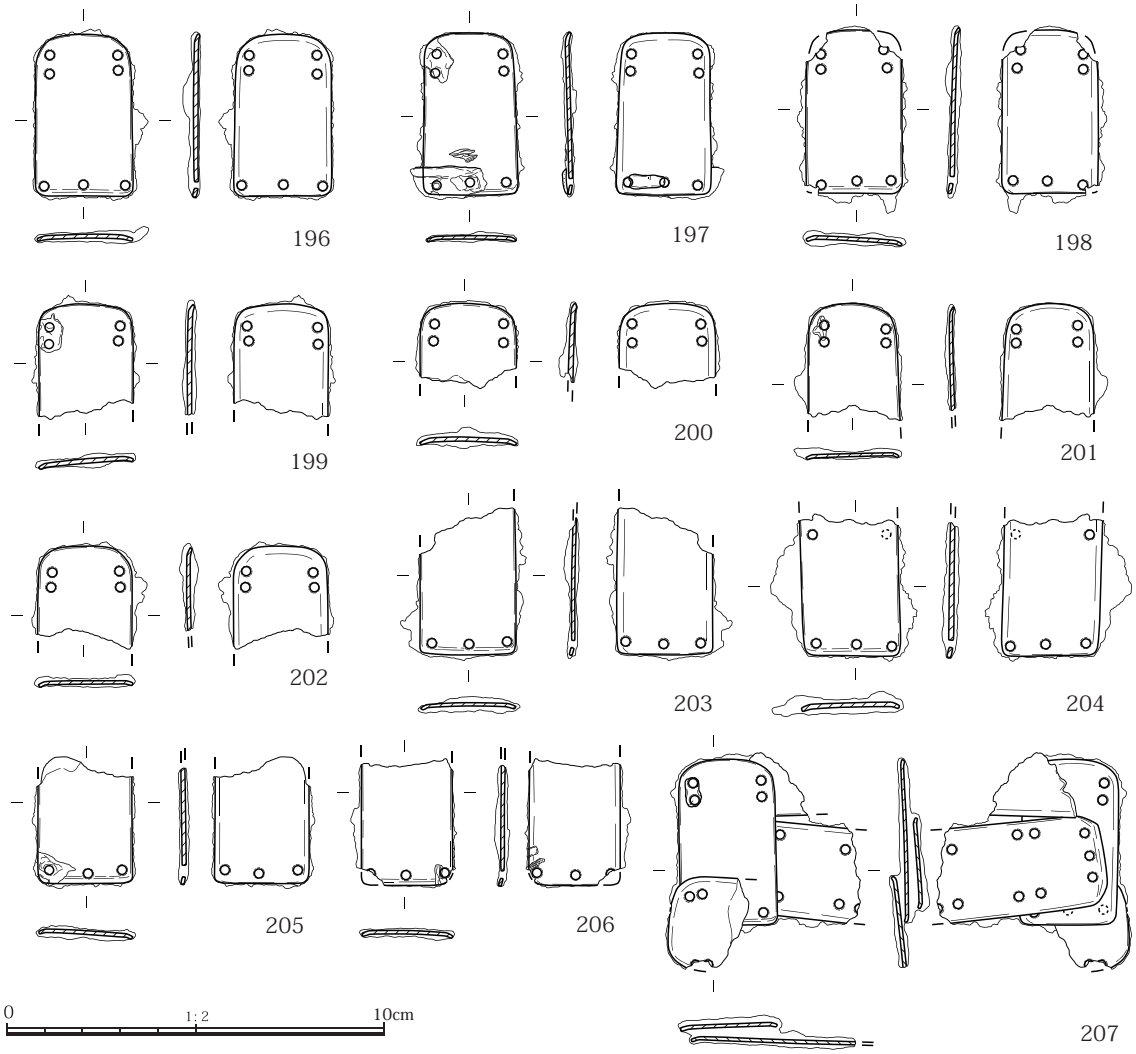
第 149 図　小札群実測図（14）：偏円頭小札 A 類（1）



第 150 図　小札群実測図（15）：偏円頭小札 A 類（２）



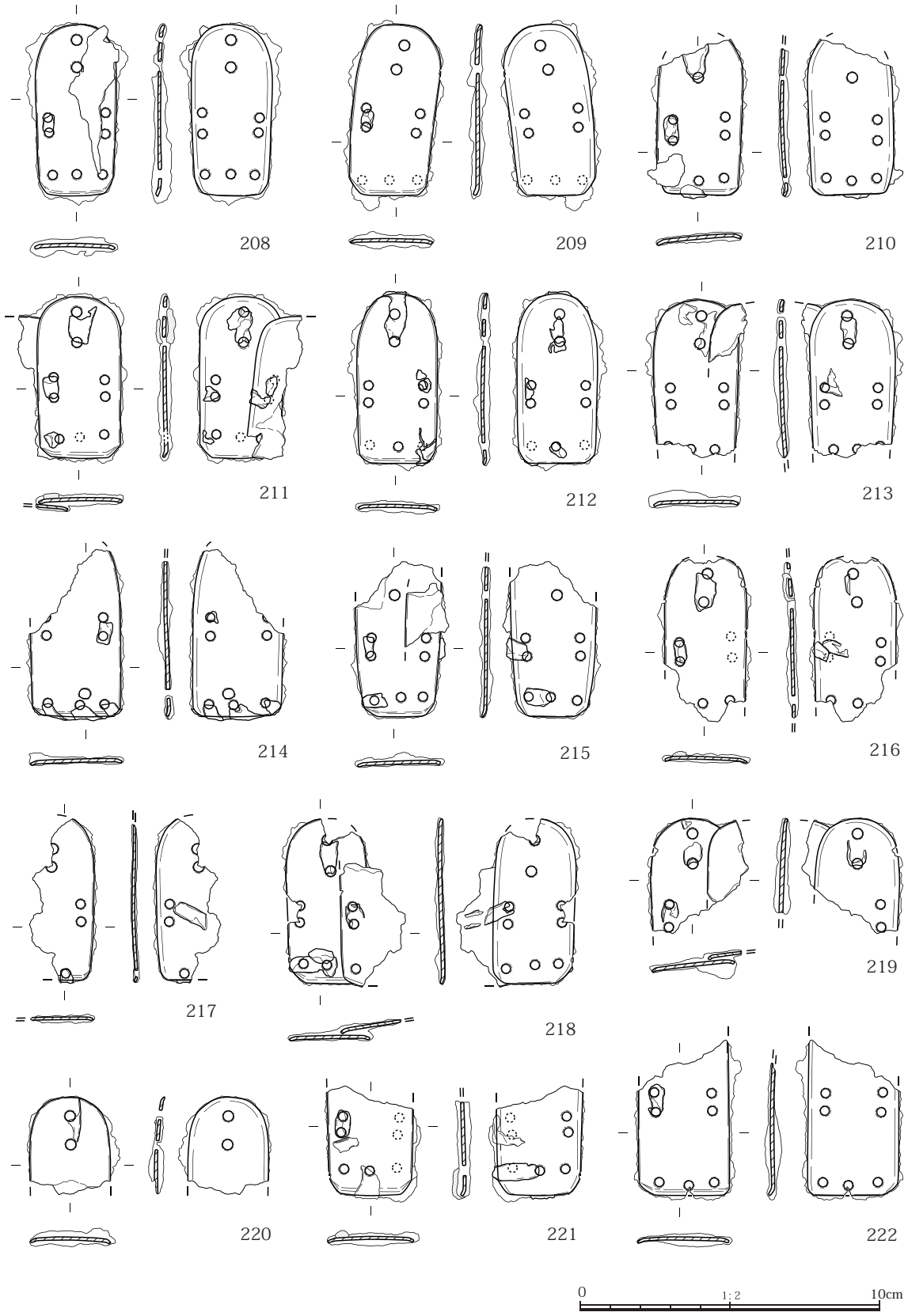
第 151 図　小札群実測図（16）：偏円頭小札 A 類（3）



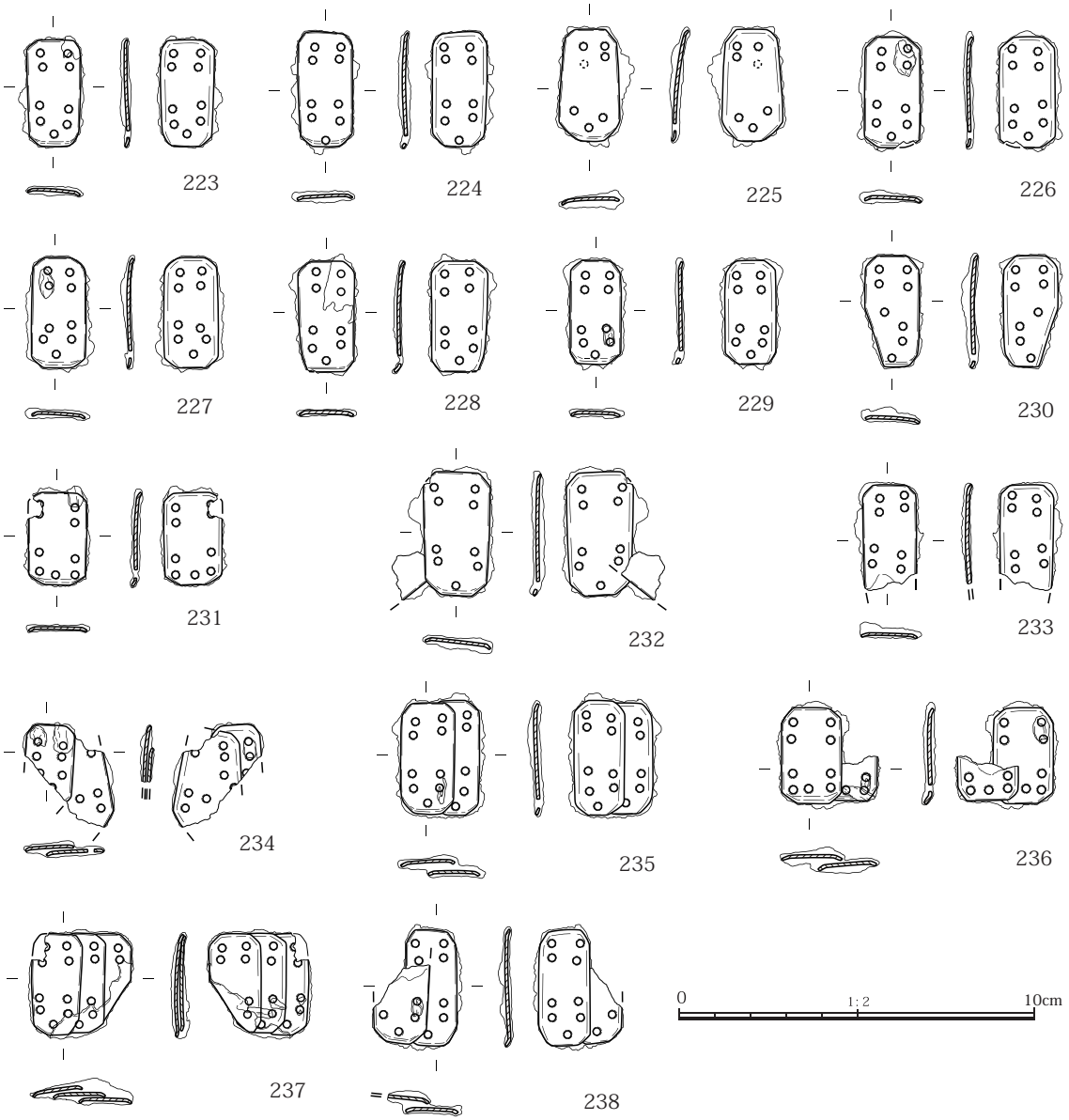
第 152 図　小札群実測図（17）：偏円頭小札 A 類（４）

列に並んだ縅孔が４孔、その下に２列に並んだ綴孔が４孔、札足付近に下搦孔１孔がそれぞれ穿たれる。全長 2.8㎝、最大幅 1.5㎝、厚さ１㎜である。縦断面形が平坦な平札である。以上の形状・穿孔を基本とするが、石槨外のものと同様に法量が異なるものや穿孔位置が異なるもの、隅切りに偏りがみられるもの、縦断面形がやや湾曲するものが存在し、バリエーションがある。かえしやきめだしは明瞭に確認できる。

連結技法については、比較的遺存しているものが多く良好に確認できる。縅技法は、裏面で立取となるものがあり（234・236）、上段からのびてくる縅紐が表面の縅孔周辺に遺存しているものがあり（226 ～ 228・231・234）、通段縅技法 a 類であると考えられる。綴技法は、表面で立取となり（229・236・238）、裏面では斜め方向にのびる革紐を確認することができ（237）、裏面で斜行となる綴技法であることがわかる。下搦技法については、小札の札足をらせん状に絡めるらせん状下搦技法であることが確認できる（236）。この下搦技法は、表面で綴技法の立取の上に重なっているものがあり、綴技法による小札の横方向の連結の後、下搦技法がほどこされていることが確認できる。237 では側辺が大きく斜めに裁断されているものが含まれる小札３枚が遺存しているが、側辺が大きく斜めに裁断され



第 153 図　小札群実測図（18）：円頭小札Ａ類



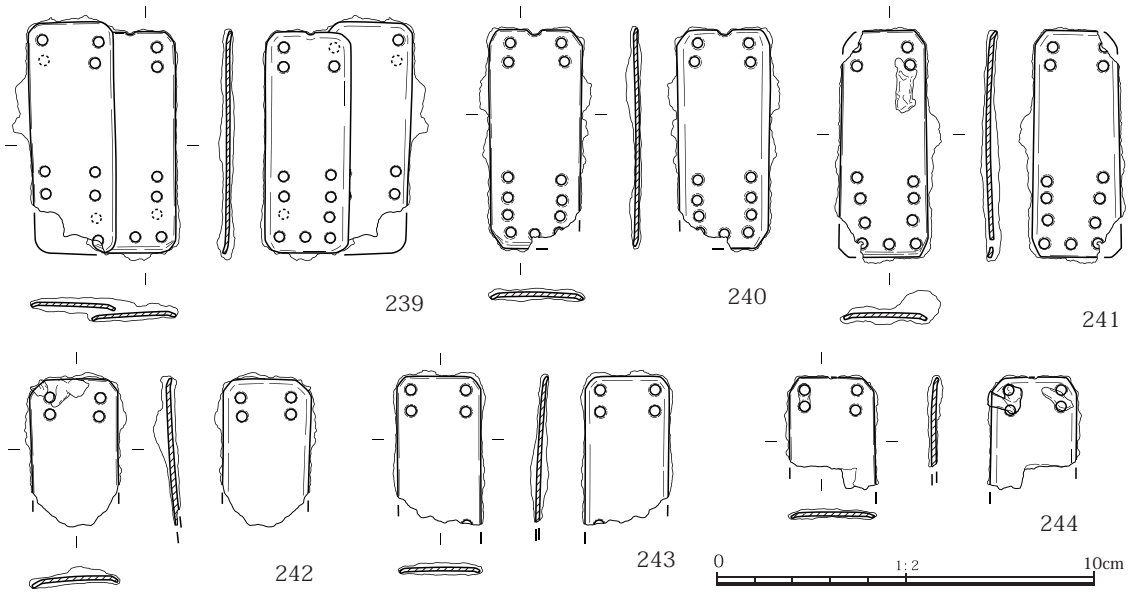
第 154 図　小札群実測図（19）：方頭小札Ｄ類

ている辺には面的に革が遺存している。この革は覆輪であり、側辺が斜めに裁断されているものは、方頭小札Ｄ類で構成された武具の側端にあたるものであることがわかる。

現状で小札の重なりが確認できるものは全て右上重ねであるが、縅・綴技法の立取の位置から、左上重ねのものも存在したものと思われる。

方頭小札Ｅ類（239 ～ 244）　６点を図化した。石槨外出土の方頭小札Ｅ類と同形で、頭部が方形を呈し、上端・下端の四隅が隅切りされる。頭部付近に２列に並んだ縅孔が４孔、その下に２列に並んだ綴孔が６孔、札足付近に下搦孔３孔がそれぞれ穿たれる。全長 6.0㎝、最大幅 2.2㎝、厚さ１㎜である。縦断面形が平坦な平札である。かえしやきめだしも確認できる。

連結技法に関しては、遺存しているものはそれほど多くない。縅技法については、241 において幅５㎜の縅紐が遺存しており、244 では縅紐が表面で立取になっている。このため、綴付縅技法であった可



第 155 図　小札群実測図（20）：方頭小札 E 類

能性が高いものとみられる。綴技法や下搦技法については、確認できなかった。

現状では 1 枚に遊離している小札と、複数枚が連結された状態で遺存する小札が確認できる。複数枚が連結された状態のものについてみれば、小札の重ねは左上重ねである（239）。しかし、241 では縅紐の位置から右上重ねであったものとみられ、小札の重ねは左上重ねと右上重ねの両者が存在したものとみられる。

239・240 では頭部に凹みが認められ、穿孔の跡とみられる。穿孔に失敗したものか、何らかの紐を通すためにこの部分に孔を穿ったものかどうかは判断できないが、このような例が複数確認できることも、この方頭小札 E 類よりも上段に何らかの武具が存在したことを示している。

方頭小札 C 類（246）　1 点を図化した。石槨外出土の方頭小札 C 類と同形である。

全長 3.7㎝、最大幅 2.0㎝、厚さ 1 ㎜である。頭部は方形を呈する。上端部・下端部は隅切りされない。頭部付近には 2 列に並んだ縅孔が 4 孔、札足付近には 2 列に並んだ綴孔が 4 孔それぞれ穿たれている。かえしやきめだしも良好に確認することができる。

連結技法については、遺存状況が良好ではなく、この個体からは確認することができなかった。表面に有機質が一部付着している箇所もあるが、この有機質が小札の連結技法に関係するものかどうかは明らかではない。

円頭小札 B 類（248 ～ 250）　3 点を図化した。石槨外出土の円頭小札 B 類と同形である。

全長 3.5㎝、最大幅 2.2㎝、厚さ 1 ㎜である。頭部は円形を呈し、下端部が隅切りされている。頭部付近には 1 列に並んだ縅孔が 2 孔、中位には 2 列に並んだ綴孔が 4 孔、札足付近には下搦孔が 3 孔それぞれ穿たれる。かえしやきめだしは良好に確認できる。249 では側辺が大きく裁断され、水滴形を呈するものも存在している。

連結技法については遺存状況が良好とは言い難い。縅技法は 248 の表面において幅 5 ㎜の縅紐を使用していることが確認されるが、裏面での遺存状況は不明であり、この縅紐の固定方向については確認

することができていない。綴技法についても明らかではない。249 で確認できる水滴形に裁断された円頭小札 B 類では、裏面で革が面的に広がっており、この小札が連結・連貫された状態の側辺には覆輪をほどこしていた可能性がある。250 でも下搦孔に横方向にのびる革紐が遺存することが確認できる。この革紐は覆輪に由来するものと思われるが、最下段にのみ覆輪をほどこしていたのか、全ての段に覆輪をほどこしていたかどうかは明らかにしえない。

なお、250 の裏面には鳥毛状の有機質が付着している。この有機質が円頭小札 B 類で構成された武具に由来するものかどうかは確定できない。

篠状鉄札（247）　1 点を図化した。石槨外より出土したものと同様の篠状鉄札の頭部と思われる。

残存長 5.7㎝、最大幅 2.3㎝、厚さ 1 ㎜である。頭部は円形を呈し、1 列に並んだ縅孔が 2 孔確認できる。頭部以外は遺存しておらず、他の穿孔については不明である。

頭部のみが遺存するため連結技法については明らかではない。しかし、裏面の縅孔周辺に、立取となる縅紐の痕跡が確認できるため、通段縅技法 a 類がほどこされていたものと思われる。つまり、この篠状鉄札よりも上段に、小札列が存在した可能性が高い。

小片 1 点が銹着しているが、これも幅 2.2㎝、厚さ 1 ㎜であるため、篠状鉄札片である可能性が高い。

小型篠状鉄札（254・255）　2 点を図化した。石槨内外より出土したものと同形の小型篠状鉄札の中位であると思われる。

254 は残存長 5.4㎝である。篠状鉄札 1 枚の幅は 1.5㎝、厚さ 1 ㎜である。縦断面形は平坦である。2 列に並んだ綴孔 2 孔が遺存しているが、綴技法については確認できていない。篠状鉄札の重なりは左上重ねである。

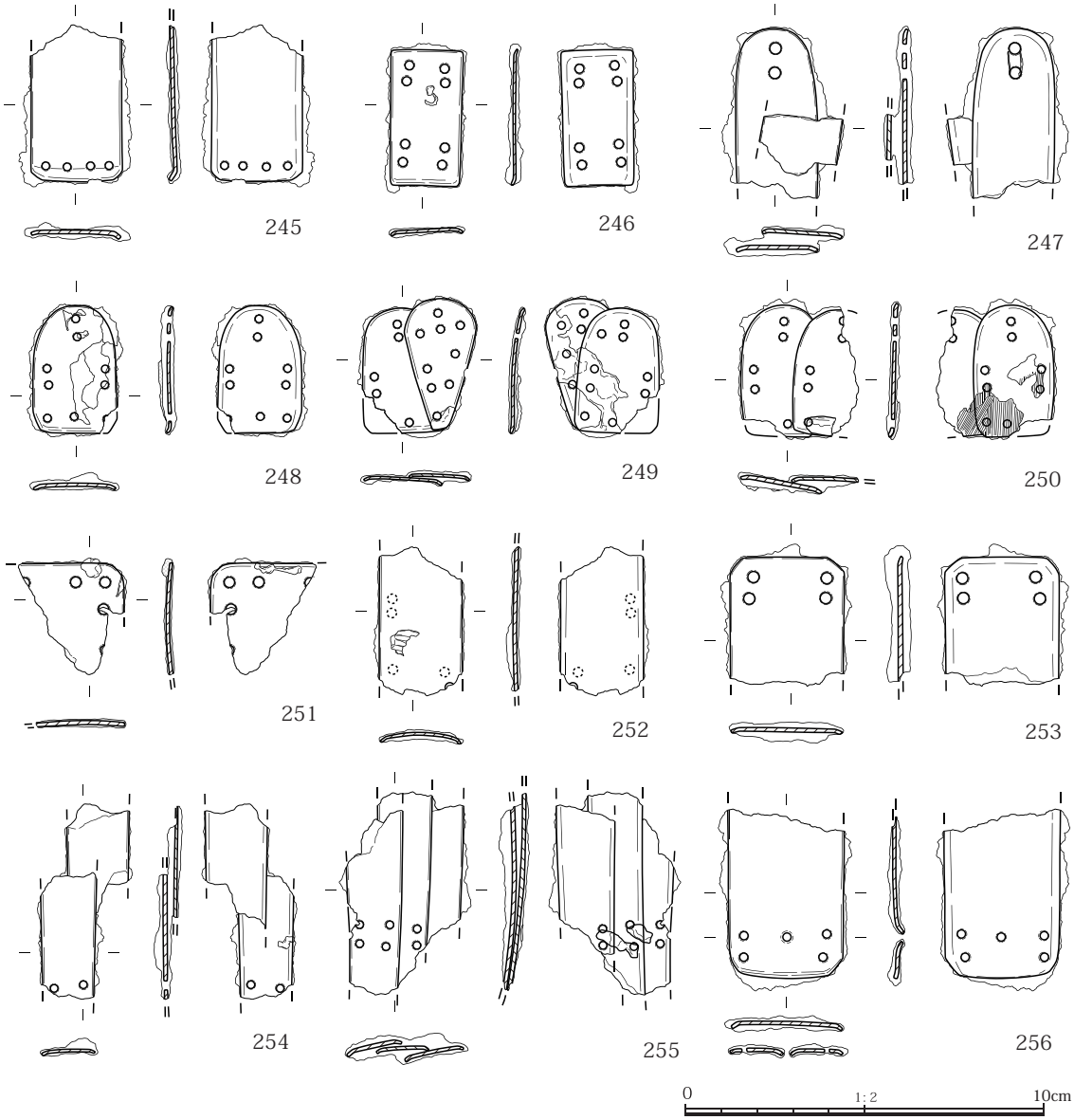
255 は残存長 5.6㎝である。篠状鉄札 1 枚の幅は 1.5㎝、厚さ 1 ㎜である。縦断面形はやや外反りに湾曲している。2 列に並んだ綴孔 4 孔が遺存しており、裏面で綴紐が斜行状に遺存していることが確認できる。篠状鉄札の重なりは左上重ねである。

その他の小札（245・251 ～ 253・256）　上記のほか、全体像の明らかでない小札が出土している。

245 は下半部のみが遺存する小札である。残存長 4.3㎝、最大幅 2.5㎝、厚さ 1 ㎜である。縦断面形は平坦な平札である。小札の札足付近には下搦孔 4 孔が穿たれるが、下搦技法については不明である。下搦孔 4 孔を穿つ小札としては石槨外出土の方頭小札 B 類があるが、こちらは最大幅 2.0㎝であり、幅が極端に異なり、綴孔の位置も異なっている。そのため、この小札は方頭小札 B 類とは区別して考えるべきであろう。

251 は甲冑の隅の部分であると考えられる破片である。残存長 3.1㎝、最大幅 2.9㎝、厚さ 1.5㎜である。やや内反りに湾曲している。端部に沿って穿孔があるが、穿孔の心々間の距離は、0.8 ～ 1.5㎝とばらつきがある。その周辺に有機質が遺存している。石槨内より出土している三角板革綴短甲片である可能性もあるが、接合せず銹の印象も異なることから、短甲とは別の製品である可能性もある。

252 は中位のみが遺存する小札である。残存長 4.1㎝、最大幅 2.3㎝、厚さ 1 ㎜である。縦断面形は平坦であるが、横断面形は中心部分がやや盛り上がっている。複数の孔が穿たれているようであるが、この孔間に連結部材としての有機質は確認できない。表面に有機質が付着しているが、これは別のものに由来する有機質が付着したものとみられる。



第 156 図　小札群実測図（21）：方頭小札 C 類・円頭小札 B 類・篠状鉄札・小型篠状鉄札・その他の小札

253は上半部のみが遺存する小札である。残存長3.6㎝、最大幅3.2㎝、厚さ１㎜である。頭部は方形で、隅切りされる。縦断面形は平坦な平札である。頭部には、２列に並んだ縅孔４孔が確認できるが、縅紐については確認することができない。方頭小札 A 類と比較するとやや幅広であるため、この小札は方頭小札 A 類とは区別して考えるべきであろう。

256は下半部のみが遺存する小札である。残存長 4.7㎝、最大幅 3.2㎝、厚さ１㎜である。札足は隅切りがなされている。札足付近には２列に並んだ綴孔が４孔あり、その間に１孔が穿たれている。綴紐の存在は確認できない。この中央部の穿孔は表面から穿たれたものであるが、この穿孔により一部凹んでいる箇所が見受けられる。穿孔の際に生じた歪みを整形していない可能性がある。　（初村武寛）

＜参考文献＞
初村武寛　2011 「古墳時代中期における小札甲の変遷」『古代学研究』192 号　古代学研究会　pp.1-19

五條猫塚古墳の研究

報告編

発行年月日　2014（平成 26）年 3 月 31 日

発　　行　奈良国立博物館
〒 630-8213　奈良市登大路町 50 番地
TEL　０７４２－２２－７７７１

印　　刷　株式会社　天理時報社
〒 632-0083　天理市稲葉町 80 番地